

## 施設・機関見学レポート2018 : 佐藤ゼミ年間活動記?

著者	佐藤 みゆき
雑誌名	地域と住民 : コミュニティケア教育研究センター年報
号	3
ページ	81-88
発行年	2019-05-31
出版者	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
論文ID (NAID)	40021940929
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1088/00001803/">http://id.nii.ac.jp/1088/00001803/</a>



実践報告

施設・機関見学レポート 2018

～ 佐藤ゼミ年間活動記 ③ ～

佐藤みゆき\*

名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科

はじめに

名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科 佐藤みゆきゼミナールでは、毎年度ゼミナールに所属する学生の関心に応じて、卒業研究、進路選択に資すると思われる施設・機関を選定して視察見学を行っている。また、各地の実務家の方々に貴重なご講話をいただいたり、他大学生との交流を積極的に行っているゼミである。ここに1年間の成果を示し、記録を残すことにしたい。今年度の活動は幅広いものとなったが、お世話になった方々には、ゼミ学生が各自で書いた御礼状をまとめてお送りすることになっている。以下の学生の感想部分はその主要なものの抜粋である。

1. 活動概要

1) 「北海道創生 未来につなげるシンポジウム」 (札幌市) 2018年5月20日 3年次生参加

「地方創生人材支援制度」は「まち・ひと・しごと創生法」を根拠として、地方創生に積極的に取り組む市町村に対して、国家公務員、大学研究者、民間人材を首長の補佐役として派遣し、市町村の総合計画の策定や施策の推進を支援する2010年度から始まった国の制度である。

「北海道創生 未来につなげるシンポジウム」は北海道市町村への派遣者の活動報告を行うものである。今回のシンポジウムでは、名寄市、天塩町、室蘭市、厚沢部町、倶知安町、東神楽町への各派遣者の報告の後、その後、北海道大学公共政策大学院の石井吉春特任教授の司会でパネルディスカッションがあった。以下は、聴講した学生の感想(原文)である。



写真1 北海道創生 未来につなげるシンポジウム

○ 名寄市の派遣者の話で印象的だったのは、1つには、「地方創生における国の役割にはインセンティブ=外圧がある」と話されていたことだ。地方にとっては必要な「圧力」であり、国は、地方が提案する政策や地方の実態について、十分理解した上で支援を決定し、それが地方の意欲を引き出すことを学んだ。2つには、名寄市は人口の割に住みやすい町だと話されていたことである。統計データから、人口に対して施設やサービスが充実して便利であり、財政基

盤がしっかりしていることがわかるという。民間調査の「住みよさランキング」で上位にある意味も理解することができた。ただ、若者目線で見ると、有名チェーン店、レジャー施設に乏しく、住みやすいと感じない面もあるのも確かである。

\*責任著者 E-mail:miyuki.s@nayoro.ac.jp

- 厚沢部町の派遣者から、「他の自治体の子どもと受験を競えるのかが心配」という親世代の住民の声から、町が運営する「公営塾」を設置するという報告があった。しかし、その後の石井吉春特任教授の講評で、「成績の良い子どもを多く輩出すればするほど、町から子どもが消えていく」という話があり、住民の声を聴き、反映しても、このようなジレンマを抱えることがあるのだと感じた。「同時に、子どもたちが地域に残りたくなくなるような教育も必要である」という視点の重要さも学んだ。
- 東神楽町での役場職員の意識改革と能力向上のあり方が最も印象に残った。派遣者の「町を変えるためには、職員が学ぶこと以外に途はない」という言葉が特に印象的であった。派遣者のお話によると、従来の町の計画などは補助金獲得のためにだけ作られ内容が感じられず、また、特産品を「種と実セレクト」という名称でブランド化したにもかかわらず、ロゴマークのPRばかりで肝心の商品がPRできていなかったという現状があったとのことである。これは職員のやる気と知識不足が原因だと気付いた派遣者は、役場職員の勉強会や講演会、他の自治体への派遣などに積極的に取り組んだという。地域活性化に必要な能力を持った職員をその地域から輩出することの重要性を感じた。
- 今回の6自治体が共通して述べていたことは、「未来」を見据えて若者に注目、投資をしていること、既に持っている資源を活かすべく、外部の資源を有効活用していることだ。大きな視点で言えば、この地方創生人材派遣もまさに、外部の刺激の一つである。

## 2) 旭川少年鑑別所 (旭川市)

2018年5月25日

3年次生参加

少年鑑別所は家庭裁判所の求めに応じて鑑別対象者の「鑑別」を行うこと、観護措置が執られて少年鑑別所に収容される者に対し、健全の育成のための支援を含む観護処遇を行うことを主な業務とする法務省所管の施設である。都道府県庁所在地にあるが、北海道は広域であるため4か所ある。家庭裁判所の審判による保護処分に基づいて入所する少年院とは異なるが、理解不足で混同されることも多い。

当ゼミでは4年ぶり、2回目の訪問である。所長の鉄島 清毅 氏にご講話をいただいた。

- 決まった処遇プログラムを行わず、自主的な行動を大切にしている姿勢や環境が、たいへん興味深かったです。規則正しい生活リズムですが、面会・面接以外は自主性に任せており、周囲からは心配される声もあると話されていました。しかし、鑑別所ではその方針に自信を持ち、むしろ貴重な行動観察場面の1つであると言われていたことから、鑑別所はごく当たり前に少年の人権が尊重された支援、ありのままの姿からのアセスメントが行われていることを知ることができました。
- 鑑別所に来た多くの少年が約4週間滞在するというので、この「4週間」という期間の重さについてのお話が印象的でした。中学生あたりの年齢の少年にとって、4週間親元を離れ、普段と全く異なる生活をするのは、非常に大きな意味を持つということを実感いたしました。それまでは、不規則な生活で食事もろくに摂らず、今を楽しむことだけを考えていたような少年が、規則正しい生活を送ることや、個室での一人の時間で今までの生活を振り返ることで、大きく変わることができるのだと深く理解することができました。
- 実際に施設を見学させていただいて、ステンドグラスの柄の窓や、ピンクや青の椅子や壁など、堅苦しくない穏やかな雰囲気の中にも、自殺防止のため外れやすくなっている居室のタオル掛け

や、緊急時のための押しボタンなど、少年と職員を危険から守るための工夫が見られ、少年鑑別所の果たす役割と責任の重さを感じました。

**3) 更生保護施設 旭川清和荘 (旭川市) 2018年5月25日 3年次生参加**

更生保護施設は、自立更生のための環境が整っていない犯罪をした人、非行をした少年に対し、一定の期間宿泊場所や食事の提供をしたり社会復帰のための指導や援助をする施設で、全国に103か所、道内には8か所ある。旭川清和荘は、作家の吉村 昭氏の「見えない橋」のモデルとなったことでも著名な施設であり、無期受刑者や薬物累犯者などの高リスク者の受け入れを積極的に行う施設としても知られている。

当ゼミの訪問は4年ぶり、4回目である。笠原 秋義 施設長にご講話をいただいた。

- 私がご講話の中で印象に残っているのは、「職員が笑顔・褒め癖をつける」というおことばです。「入所者に会ったときには、必ず何か1つ褒める」。また、注意をするときには「注意をする前に褒める」というように、褒めることに重点を置くことで入所者の更生につなげていることが興味深かったです。誰かに褒められたことが少なかったであろう入所者が褒められることで、今後の自信とやる気につながり、注意も前向きにとらえることができるのだと感じました。
- 専門職を配置した後に特定の入所者を募集する一般の流れとは異なり、入所者の傾向に合わせて彼らの特性に見合う専門職者や社会資源を配置・活用するという流れが、よい関係性の構築に寄与しているのだと感じました。

**4) 北海少年院 / 紫明女子学院(千歳市) 2018年6月29日 3年次生参加**

当ゼミでは、毎年千歳市郊外にある北海少年院(男子対象)と隣接している紫明女子学院(女子対象)を見学させていただいており、今回で7回目の訪問である。北海少年院では、佐野 周二 次長、紫明女子学院では、平原 政直 院長にご講話をいただいた。

- 北海少年院では、入院から出院まで、標準11か月の間に進級する過程で、各級の目標や処遇内容が明確であることと、大教室で進級式を開いているということが印象に残っています。課題の達成は、目標があつてこそ実現できるものでありますが、その目標がいかに明確であるか、すなわち、呑み込みやすいものであるかということは、少年の動機付けにおいて不可欠な要素だと感じました。そして、フォーマルな場で人に褒められる、さらに、全員がそれを温かく受け入れるという経験は、そのような経験が少ないであろう少年が進級を目指す大きなモチベーションになると感じました。
- 紫明女子学院では、女子少年院ということで、男子少年院とは違った特徴や、雰囲気を知ることができました。女子少年の特徴として、男子少年よりも「話を聞いてほしい」という思いが強いというお話は共感できました。女子少年がする非行の内容も、薬物、性犯罪が多く、「誰かに頼りたい」「そばにいてくれる人がほしい」「さみしい」という心理面が関係していることが多いことがわかりました。また、そのような女子の特徴から再犯率が低いというお話も印象に残っています。出所後、少年院に電話をかけてきたり、手紙を書いたりするのは、職員が女子少年の心の拠りどころになっているからだと感じました。このように、非行や犯罪と、心理とは密接に関連していることを改めて知り、アフターケアの重要性についても勉強になりました。

5) 認定NPO法人 アルテピアッツァびばい(美唄市) 2018年7月6日 3年次生参加

「認定NPO法人 アルテピアッツァびばい」は、美唄市郊外にある、世界的な彫刻家、安田 侃氏の作品を展示した屋外彫刻美術館「アルテピアッツァ美唄」の運営母体である。安田氏は、故郷である美唄市に美術館を作るにあたり、「子どもが心を広げられるように」と幼稚園の近くに作品を置くことにした。作品には、触れたり、乗ったり、寝そべったりと、鑑賞者が思い思いにすることができる。広い園内を散策した後、事務局長の加藤 知美 氏に、開園に至るまでの経緯、基本理念、運営の現状等についてうかがった。

- 園内の数多くの作品に、大きないたづらをされたことがないというお話に驚きました。スタッフの方々が、毎日点検して掃除をするという、作品をとっても大切にしている気持ちが観る人にも伝わるのだと思います。入館料を無料にして、少しでも多くの人に芸術を感じてもらいたいという思いにも感動しました。



写真2 アルテピアッツァ美唄にて

- 入館料を徴取していないことや、門の設置やルートの設定をしていないことについても、感心しました。アルテピアッツァ美唄を敷地の限定された1つの施設ではなく、居場所の1つとして地域に開かれた資源にするという姿勢を見事に体現しており、その成果として、立地条件にもかかわらず、子どもから大人まで、地域の方が気軽に訪れる場となっているのだと感銘を受けました。
- 実際に作品を鑑賞してみたときに、広大な園内にある様々な作品を探して歩くのがとても楽しかったです。自然の中にと、心が安らぐとともに、豊かな時間を過ごすことができました。

なお、訪問時には、彫刻のメンテナンスのために一時帰国していた安田 侃氏ご本人とお会いすることができて、大変記念になった。

6) 北大公共政策大学院 榎本芳人教授講義/当別町 佐藤立議員演習(札幌市) 2018年7月24日

3年次生参加

今年度初の試みで、本学の札幌市のサテライトオフィスに講師をお招きして授業を受けた。講師は、厚生労働省からの出向で、北海道大学公共政策大学院で現代社会保障論を担当されている榎本 芳人教授と、北海道大学法学部の公務員志望者に「地域課題を考える」演習を行っている佐藤 立講師である。佐藤氏は当別町の現役議員でもある。

海外勤務経験豊富な榎本教授には、「海外の福祉情勢と厚生労働省の関わり」と題してご講義をいただいた。佐藤講師には「身近な地域課題の見つけ方」という内容で、現実の当別町の課題、「公園遊具の更新事業」について参加者が町の職員になったつもりで協議して基本計画の案を考え、教員を町長に見立ててプレゼンテーションを行うという、福祉学科の学生にはやや高度な演習であったが、限られた時間内に結論に到達し、発表することができた。

- 榎本先生のご講義では、日本における高齢者支援の知識や経験を、タイなどの途上国に伝えようというプロジェクトのお話が大変興味深かったです。日本の高齢者支援についてだけ学んでいると、課題ばかりに注目しがちですが、他国との協力体制など、国際的な視点で見ると、すでに急速な高齢化

を経験し、対応してきた日本の高齢者支援のあり方は、他国に伝達することのできる十分なレベルのものになっているとわかりました。特に、ケアプランを作成し、病院や自治体、訪問介護などが連携して介護サービスを提供していくケアマネージメントのあり方は多くの国で活用できることを実感しました。

- 榎本先生のご講義で、経済連携協定、技能実習制度など外国人材の受け入れのお話が印象的でした。今後の日本では高齢化の進行により、さらに介護ニーズ、看護ニーズの高まりが危惧されており、外国人材の受け入れシステムの重要性を再認識することができました。
- 佐藤先生の演習では、政策の策定にあたって「幅広い年代を対象にすると、すべての人にとって中途半端になってしまう」という言葉がとても興味深かったです。対象を絞らないと逆にプラン全体がぼやけてしまい、説得力に欠けた提案となってしまうと知り、広く地域住民のニーズに応えていくことを目標とするソーシャルワーカーのアプローチとの違いを知ることができました。
- 佐藤先生の演習で、私たちの議論には全体的に根拠が欠けていたため、多くの指摘を受けましたが、「なぜ」「誰のために」「(根拠づけは)どのようにして」など、5W1Hを重視されていることも印象的でした。また、「4つのブレンがあるなら、4つ使った方がいい」と、少人数の議論では司会を設ける必然性はなく、皆が平等に話せばよいということ、沈黙があれば、「今、何を考えているの」という声かけが突破口になること、メンバー間のイメージの共有が大切で、これに食い違いがあると後にトラブルのもとになることなど、多くのことを学ばせていただきました。

#### 7) 東京農業大学オホーツクキャンパス訪問(網走市) 2018年10月5日 3年次生・4年次生参加

今年の4年生との合同ゼミ旅行は、網走市であった。市内にある東京農業大学オホーツクキャンパスは、ものづくりを重要視した建学者、榎本 武揚の精神を受け継ぐ同大の理念を最も体现化したかたちで、地域に密着した展開を行っている。このたびは、生物産業学部の菅原 優 准教授のゼミ学生と交流をさせていただいた。菅原ゼミの3年生お二人のプレゼンテーションをお聞きし、普段の学びのアプローチとは異なるものの、当ゼミ生も大いに刺激になったようである。

お一人は、地域産業経営学科3年生のIさんで、チャレンジテーマは「生産者と消費者を近づける」ことである。これまでの3年間は、オホーツクの地域と特産物の生産者を知るために、農業研修や現場に飛び込んで関係性を作ってきた。将来は起業し、北海道の野菜や加工品販売を行いながら食育活動をしたいという。

もうお一人は、同じく地域産業経営学科3年生のMさんで、大学で認定している「オホーツクフードマイスター」として、道の駅での500人へのアンケート調査を基に、網走限定商品「オホーツク・スープ」を考案した。お二人もであるが、オホーツクキャンパスの学生の大半は道外出身者であり、「北海道の人は北海道の魅力がわかっていない」「もっと発信すべき」と口をそろえて述べていたことが印象的であった。

- Iさんのお話をお聞きし、3年間を通して大変能動的に活動されており、その行動力に驚きました。課題を意識しながら活動に取り組む姿勢や、長期休業を活かして自分自身が農業研修や販売研修に赴く姿勢など、現場を知ることの重要性が勉強になりました。また、「相手のメリットになること」を重視するところは、経営学科ならではの視点と感じました。Mさんのお話の中では、学生が主体となってアンケート調査や商品開発などを行っており、その上で、消費者と生産者の両方の視点を考え、どちらかに偏らないようにすることで、物事を多面的にとらえることや、新しい発想につながることを

学びました。(4年次生)

- Iさんは「まずはターゲットを(子どもではなく)母親に」と言われており、これは経営ならではの非常に興味深い内容でした。また、生産者との関係づくりについての話題の中で、「まずは1回会って」という話がありましたが、福祉の援助と共通している面があり、面白く感じました。

Mさんのお話では、商品開発の中で「限定感」を持たせる方法として、「ストーリー性」を挙げていた点が印象に残っています。(3年次生)

- Iさんのお話をお聞きして、私も生産者や生産地を意識した食材を買うことが少なかったため、「生産者と消費者が離れている」という指摘は、農業王国北海道にいながら確かにもったいないことだと感じました。

Mさんのお話に関しては、「特産品」といっても、全国どこにでも手に入る現状は確かにあります。膨大なアンケートを取ったり、試作を積み重ねていくことで、消費者側の視点に立った「地元限定の特産品」を生み出すことができるとわかりました。プレゼンの最後には、高齢者介護の場面での名寄市立大学とのコラボレーションの可能性まで考えてくださり、ありがとうございました。(3年次生)

#### 8) 博物館 網走監獄(網走市)

2018年10月11日 3年次生・4年次生参加



写真3 監獄博物館 入口にて

網走の観光名所といえば、まず挙がるのが網走監獄であろう。網走監獄は、明治時代から実際に網走刑務所で使用されていた建物を保存公開している野外歴史博物館である。リアルな人形で再現された各施設では当時の様子がよくわかり、体験型コーナーもあって半日十分楽しめる施設である。観光施設では、一般的にいかにリピーターを獲得するかが大きな課題であるが、近時、明治時代の網走監獄を舞台のひとつにした漫画「ゴールデンカムイ」の人気もあって、JR北海道等とのタイアップが奏功しているように見受けられた。

ゼミで見学するのは3回目であるが、前回の2月訪問時とは打って変わった秋晴れで、紅葉が美しかった。

#### 9) 「北海道学生研究会 SCAN」第9回報告会(札幌市) 2018年11月17日 3年次生参加

「北海道学生研究会 SCAN」は、北海道内の学生の研究・交流をはかる団体で、2010年に釧路公立大学の試みから発足した。主な活動は、年1回、開催される合同研究発表会であり、昨年は当ゼミも初参加をした。今年は3年次生が学ぶために、聴講のみで参加することにした。今回の共通テーマは「地域コミュニティ」で12チームの発表があったが、このたびは保健医療福祉系のテーマの発表は皆無であった。

- 初めてSCANの発表会を聴講して、印象に残ったことが2つある。1つには、研究におけるエビデンスの重要性である。質疑や講評を聞いていると、研究したことの根拠となるデータやグラフはあるの

か、考察や結論が調査をした結果を基にしているのかなどの指摘が多くある。・・私たちがテーマとしようとしている貧困について研究すると、データ化が難しいことが多く、エビデンスとなる文献の引用や参考、地域課題把握のための調査、政策提言が重要になると考える。また、2 つ目として、プレゼンについて、研究したことをどのようにわかりやすく発表するかも大切であると感じた。今回の発表はすべて経済のアプローチであったため、ところどころ理解できない用語があったが、私たちが発表するとしたら、福祉を全く知らない人にも理解できるような発表も意識しなければならないと感じた。

- ほとんどのグループに対する講評で、「実際にその街を訪れたのか」と質問されていたことが印象的だった。インターネットの情報だけではなく実際に行ってみて、イベントに参加してみて初めてわかることも多いのだとわかった。データは事実なのか深掘りし、事実であるという確証を得るために、現地に行くことは重要なのだとわかった。

また、「なぜ、このテーマを選んだのか」「どうしてその地域にしたのか」という質問も多く、政策提言を行う上で欠かせない重要観点なのだと学んだ。

#### 10) 札幌市児童相談所(札幌市)

2018年12月6日

3年次生参加

札幌市児童相談所は札幌市こども未来局児童福祉総合センター内にある。例年お伺いしており、今年で4回目の訪問であるが、資料に基づき児童相談所の業務の現状、特に今年話題に上ることの多かった児童虐待について、実務上の課題も含めて詳しい説明を受けた。当ゼミ出身者も多く入職しており、当日は業務多忙の中、顔を出して出迎えてくれた。公務員を目指す現役ゼミ生たちの励みになったものと思われる。

- 児童相談所が持つ職権によって一時保護する権限と、その責任についてのお話が大変印象深かったです。児童の安全が最優先といっても、親と子どもを強制的に離すことは非常に大きなことで、その責任は本当に重いものだと感じました。虐待を受けているかもしれない子を救うためには「大丈夫だな」ではなく、「危ないのでは」という視点で見ることで「違和感」を見つけることが大切だということばも深く心に残っています。注意深く見ながらも、ただ保護すればいいというわけではなく、境目の中で、一時保護をするかどうかの判断は非常に難しいものだろうと感じました。
- 発達障害等の育てにくさに関する相談が虐待相談と同程度寄せられているという事実が大変印象的でした。児童相談所が多様な悩みを受け止める場として、また、そこから状況に応じて適切な養育環境へとつなぐパイプ役として、福祉的な機能を果たしていることを改めて学ぶことができました。

#### 11) 児童養護施設 興正学園(札幌市)

2018年12月6日

3年次生参加

北海道内の児童養護施設でも先駆的な取組を多く行っている興正学園には、本学からも入職者が多くいる。当ゼミもよく施設見学させていただいており、今年で4回目の訪問である。

- 部屋割りについて、男女混合で年代も違う子どもたちが同じ部屋で生活していることが大変印象的でした。違う世代の子どもたちが共に生活することは、上下関係がある中で協力し、自分の役割を果たすことを身につけるためにも大きな意味を持つということがよくわかりました。幼児は幼児でまとめた方が職員としては楽であるのに、あえてそうせずに違う年代同士で暮らすことで成長を図っているというお話には大変感動いたしました。



- 職員の方々は家庭的な環境の中で、「子どもの本当の姿」を引き出す関係作りをしていると学ぶことができました。子どもが安心して生活ができる場所を意識することで、取り繕っている可能性がある子どもの表面的な部分だけではなく、内面的な部分も見ることのできる支援ができていたのだと感じました。それは、職員の方々が1人1人の子どもの幸せを考え、決まりきったマニュアルに従うのではなく、「正解がない支援」を追求し続けているからだ実感できました。

#### 12) 北海道科学大学学生との交流(名寄市)

2019年1月16日

3年次生参加

北海道科学大学人間社会学科の3年生お二人が、同大の坂井 俊文准教授、保莉 英希教員の引率で来学されたので、ゼミ生が学内を案内し、交流の機会を持った。一行は、同日に名寄市役所で開催された「北海道科学大学による地方創生☆政策アイデア発表会」で「天塩川・中流域～名寄市・美深町・下川町～魅力を引き出す政策案」というテーマのプレゼンテーションを行うために名寄に来られ、時間の合間に本学にお立ち寄りくださったものである。市役所のご厚意で、当ゼミ生も発表を聴講させていただき、勉強になった。

#### 13) 地域経済分析システム(RESAS)講習(名寄市)

2019年1月17日

3年次生参加

地域経済分析システム(RESAS:リーサス)は、人口動態や産業構造、人の流れなどの官民ビッグデータを集約し、可視化するシステムで、地方創生のさまざまな取組を情報面から支援するために、経済産業省と内閣官房(まち・ひと・しごと創生本部事務局)が提供しているツールである。

前日の北海道科学大学の発表のために同行された、経済産業省北海道経済産業局の調査員、森 美恵子氏に大学に来ていただき、講習会を実施していただいた。北海道科学大学の学生もサポートしてくださり、前日に引き続き良い交流の機会となった。

今年度も現場に出向き、実務の方々の貴重なご講話をいただいて、教員、学生ともども新たな気づき、学びを多く得ることができました。

#### おわりに

最後に、私たちの視察見学に快く応じてくださり、ご丁寧なご対応をしていただきました関係機関、施設の皆様方に心より感謝申し上げます。

2018年度 佐藤みゆきゼミナール

4年次生	黒田 彩加	外崎 ひかる	藤井 七海	藤森 柊
3年次生	池田 玲奈	中屋 玲央	山崎 愛梨	渡邊 美奈